

2

次の二つの文章を読んで、それぞれの内容に触れながら、「観察すること」についてあなたの考えを五〇〇字以内で述べなさい。その際、三段落または四段落構成とし、Aの内容を第一段落、Bの内容を第二段落、そしてあなたの考えをそれ以降の段落に書きなさい。ただし、あなたの考えの説明として具体的な例を示すこと。

A

筋肉や骨の名前は、理解するためにはあるのではない。目の前にあるものを理解した後、誰かに説明する際に使う「道具」である。そして解剖の目的は、名前を特定することではない。生き物の体の構造を理解することにある。^{*}ノミナを忘れ、まずは純粋な目で観察することこそが、体の構造を理解する上で何より大事なことである。

当時の私はこのことに気がついておらず、名前を特定することが目的化し、まさに名前に振り回されていた。上腕頭筋を見つげようと上腕と頭を結ぶ筋肉を探していたし、教科書に「この筋肉は2層に分かれ」と書かれていたら、2層に分かれています筋肉を見つげようとしていた。目の前にはキリンの構造を理解するために観察するのではなく、横に置いた教科書に描かれた構造を、キリンの中に探し求めてしまっていたのだ。

「自ら理論立てて考える人でなければ、優れた観察者にはなれない」というのは、かの有名なチャールズ・ダーウィンの言葉だ。この時の私は、理論立てて考えながら解剖をしていなかった。

名前の特定にこだわることを一旦やめてみよう。そう思い、気を取り直して^{*}シロの遺体に向き直る。目の前の筋肉がどの骨とどの骨をつないでいるのか。その筋肉が収縮したら、キリンの体はどんな風に動くのか。大きい筋肉なのか、小さい筋肉なのか。長いか、短いか。筋肉の名前を1つも知らなくても、目の前に実際にキリンの遺体があるのなら、考えることはいくらでもある。

そうして初めて、自分が教科書ばかり眺めて、キリンの方をあまり見ていなかったことに気がついた。せっかくキリンの遺体が目の前にあるのに、きちんと向き合っていなかったような気がした。

解剖台の横にノートを開き、名前もわからぬ「謎筋A」の付着する場所、走行、大きさ、長さを丁寧^{ていねい}に観察し、記録していく。次の解剖でも「謎筋A」であることがわかるよう、筋肉の特徴をなるべく細かく描き込んでいく。名前を特定しようとしていたはずと真つ白だったノートが、文章やスケッチで埋められていく。

ようやく頭を使って解剖することができるようになった瞬間だった。

(郡司芽久『キリン解剖記』(二〇一九年)ナツメ社)

*1 ノミナ=Nomina。ラテン語で「名前」の意味。

*2 筆者(郡司)が解剖した二体目のキリン。

B

いい観察が行われると、問いが生まれ、その問いから仮説が生まれる。そして、次の新しい観察が始まる。その繰り返しによって、対象への解像度は上がっていく。

ニュートンが、リンゴの落下から万有引力ばんゆういんりょくを導き出したというエピソードを、なぜ※僕は伝説などではなく、真実だと思えるのかの理由もここにある。

はじめは、「なぜリンゴは地面に落ちるのだろうか？」という子どもでも思いつきそうなとてもシンプルな問いが生まれる。そこから「地面がリンゴをひっぱっているのでは？」というラフな仮説になり、観察が始まる。さらに観察は新たな問いを生み出し、仮説がどんどん更新される。そして最終的には「万有引力の法則」という世紀の発見へとつながったのだと僕は想像する。

人類の偉大な発見の「はじめの一步」は、本当にシンプルな問いだったのだと思う。いきなり偉大な問いを見つけて、人生をかけて取り組むのだと思うと、多くの人は自分の手元には、そんな問いがないと絶望することになる。そうではなく、誰にでも思いつくようなありふれた問いを、仮説と観察によって、研ぎ澄とましていくのだ。

(佐渡島庸平『観察力の鍛え方―一流のクリエイターは世界をどう見ているのか―』(二〇二二年)SB新書)

※3 筆者(佐渡島)本人のこと